

粗放的なニゴロブナ生産の検討

根本守仁

1. 目的

ニゴロブナの養殖に関する相談が時々あるが、設備投資や商品サイズになるまで時間を要するといった課題から、集約的な生産はほとんど行われていない。そこで、粗放的な生産について検討した。

2. 方法

試験は、600 m²のコンクリート屋外池で実施した。

施肥は、2021年5月7日に実施した。池の水深は20 cm程度とし、消石灰75kg(0.125kg/m²)、発酵鶏糞150kg(0.25kg/m²)を散布した。

孵化仔魚の収容は、当初は2日齢のものを収容する予定であったがピーカーテストを行ったところ生残しなかったため、結果として5月21日に4日齢の仔魚6,000尾(10尾/m²)を収容した。

収容後の水管理は、収容から約2か月間は基本的には止水とした。水深は約20 cmで開始して収容から30日以降は徐々に深くした。そして、収容から約2か月後からは水深80 cmにして、40トン/日程度の琵琶湖水を注水した。

育成期間中に、給餌は行わず、酸素供給のための曝気もしなかった。水草等の除去については、収容直後にはウキクサ、収容から約30日後には糸状藻類が繁茂したため、タモで除去した。

成育の調査は、小型のもので採捕して実施したが、計測後には池に戻した。

そして、収容から109日目の9月7日に、水を抜き、全量を取り上げた。

3. 結果

収容後の生残状況について、7月半ば以降は朝に酸欠による鼻上げがほぼ毎日見られたものの、育成期間全体を通じて目立った斃死

はなく、9月7日時点での生残尾数は4,533尾であり、生残率は75.6%であった。集約的な生産を行った場合の生残率が約25%であること等を考えると、極めて良好だったといえる。

収容後の平均体重の推移を図に示した。収容から38日後で4.1gであり、これまで実施した池での集約的な種苗生産や水田を活用した生産事例と比較しても高成長であった。そして、その後も順調に生育し、9月7日の取り上げ時点での平均体重は16.2gであった。栽培漁業における種苗生産では10月に20gにまで成長させることを目標に取り組んでいることを考えれば、成長も良好だといえる。

なお、池全体でのニゴロブナ生産量は73.39kgであり、1 m²あたり122gであった。

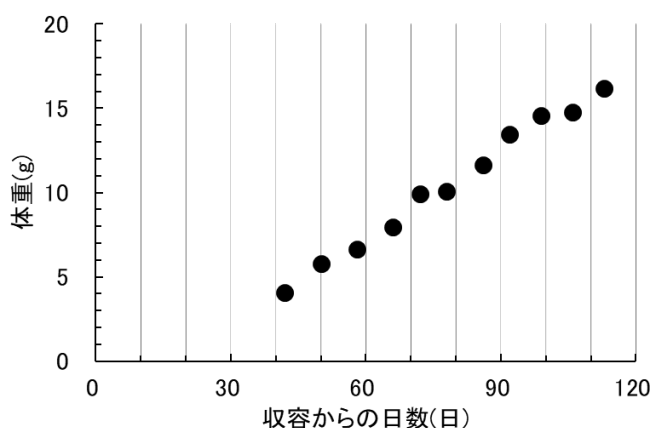


図 ニゴロブナの平均体重の推移